

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 10 月 2 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00882

研究課題名（和文）世界展開と高大接続のためのインターアクティブ・プレゼンテーション教授法の提案

研究課題名（英文）A Proposal for the Teaching Method of Interactive Presentations to Excel on the Global Stage and Foster Collaboration Between High Schools and Universities

研究代表者

奥切 恵（Okugiri, Megumi）

聖心女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：70410199

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：大学生によるプレゼンテーション動画データを、科学研究費助成事業（課題番号25370705）で構築した英語意見文コーパスデータThe Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Studentsと比較分析し、書きことばと話しことばの接点となるプレゼンテーションの言語における英語学習者の特徴を談話的に分析することができた。また日本全国の教育機関にアンケート調査をするとともに初等教育から高等教育に関わる教員からインタビュー調査を実施し、英語プレゼンテーション教育の高大連携について検討し、今後の英語教育に資することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の大学教育において、世界で通用する英語プレゼンテーションスキルを養成するために、言語と非言語コミュニケーションの両視点から英語プレゼンテーション教育に示唆を与えることができた。またリーダーシップスキルも含めた英語能力について調査し、さらに小学校から大学までの英語教育実態調査を実施した結果、教育現場と教育連携における課題を明確化し、効果的な英語プレゼンテーション教育についての提案をすることができた。本研究結果は、グローバルレベルで活躍できる学生を育む英語教授法に貢献することができたといえる。

研究成果の概要（英文）：Using presentation video data by college students, comparative analyses were conducted with the previously constructed English opinion essay corpus, 'The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students,' funded by the Scientific Research Grant (Project Number 25370705). This allowed for a discursive linguistic analysis of the characteristics of English learners in the language of presentations, which are a juncture between written and spoken language. Additionally, by conducting surveys with educational committees across Japan and interviews with English teachers involved in education from elementary to higher levels, we were able to examine the collaboration between colleges and high schools in English presentation education, contributing to future English education.

研究分野：英語教育、言語習得、応用言語学、プレゼンテーション教育、リーダーシップ教育

キーワード：英語プレゼンテーション インターアクティブ・プレゼンテーション 談話分析 高大連携 リンガフ
ランカとしての英語 言語習得 英語教育 プレゼンテーションスキル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

人を惹きつけ心に響く、説得力に満ちたインターアクティブなプレゼンテーションができる人材を育成することは、日本の教育現場でも必須となってきた。本研究では、日本人が世界で活躍するために必要とされるプレゼンテーションスキルとはどのようなものかを明らかにし、大学レベルでの効果的なプレゼンテーション教育を提案を試みた。そのためには単に英語圏のプレゼンテーション教育を輸入するだけでは、日本の教育現場に応用できない。なぜなら、英語圏の小学校・中学校・高等学校(小中高)ではかなり早い段階からプレゼンテーション教育だけでなく、論理的思考を要するアカデミックライティング教育も盛んに実施されているからだ。英語プレゼンテーションというのは、実際はレポートなどといったアカデミックライティングと目的・内容・構造において共通点が多い。例えばアカデミックライティングも相手(読者)を高く意識し、インターアクティブでコミュニケーション、読者を説得するものが良いとされており、プレゼンテーションと共通するのである。こういった類似点からも、英語圏での早期からのアカデミックライティング教育方法が学習者のプレゼンテーションスキルにも大きく影響して可能性が高いといえる。

本研究では、日英プレゼンテーションの言語的・非言語的分析、教育法の比較、そしてアカデミックライティング教育との関係を明確にすることによって、日本の教育現場に必要なとされているインターアクティブ・プレゼンテーション教育を開発・提案することを目標とした。英語母語話者と日本人英語学習者による英語プレゼンテーションを言語・非言語の両側面から比較分析することにより、日本の教育現場にとって、かつ世界で活躍できる大学生にとって必要な大学の英語プレゼンテーション教育法を提案することが重要である。また、聞き手との意思疎通や理解確認などを考慮したインターアクティブ・プレゼンテーションの導入方法を提案し、研究・教育分野だけでなく、グローバル社会で活躍できる人材育成や社会貢献が求められている。また、プレゼンテーションとライティングの教育を比較検討することで、相乗効果も得られる可能性が期待できる。

2. 研究の目的

一般的に効果的な英語プレゼンテーションというのは、単に一方的な伝達ではなく、聞き手である聴衆との意思疎通や理解確認などを含むインターアクティブなプレゼンテーションと言われている。それは聴衆とプレゼンターの活発なインターアクションが重要視されるプレゼンテーションということになるが、国内だけではなく国外でも未だ体系的学術的研究がなされていない。そこで、本研究は日本の英語学習者による英語プレゼンテーションの言語使用や非言語コミュニケーション等を英語母語話者のものと比較をすることによって、日本の大学生の弱点を洗い出し、明快で説得力のあるインターアクティブな英語プレゼンテーション法を提案することを目的とした。

本研究では、日本の教育現場と日本の文化に適した独自の教育法の開発が重要と考えるところに、まずは英語圏と日本の教育現場の違いについて着目し、主な違いはアカデミックライティング教育であると指摘する。英語圏でアカデミックライティングは、大学入試の必須科目でもあるため、教育上重要視されており、学校教育現場においても比重が大きい。さらにアカデミックライティングスキルは論理的思考にも関わっているため、同様の思考を必要とするプレゼンテーションスキルにも大きく影響している。さらには英語圏での教育事情と日本の教育状況が異なることや、文化的相違を鑑みると、英語圏の大学でのプレゼンテーション教育をそのまま事情の違う日本で真似ることでプレゼンテーション教育の改善には繋がる見通しが低く、日本の教育現場に適した教育が開発されるべきであることは明らかである。本研究では、日本の教育現場に最適なプレゼンテーション教育と、アカデミックライティング教育との関係を探ることによって、論理的思考を取り入れながら、プレゼンテーションとアカデミックライティング両方のスキルを同時に、かつ効果的に習得する統合的な教育法に発展させることができる。

また、本研究が提案する新しいインターアクティブ・プレゼンテーション教育は、ビジネスシーンなどを含む社会人のプレゼンテーションスキルを磨く生涯教育としても応用可能であり、世界展開力強化事業等の政策をはじめ様々な日本の将来構想に寄与できる。さらに、早期教育と大学教育の関係を明確にすることにより、英語教育の高大接続においても多大な貢献が期待でき、教育の質の向上にも繋げることができる。

3. 研究の方法

本研究では、英語母語話者と日本の英語学習者の大学レベルでの英語プレゼンテーションの文章構造・言語形式・内容・アイコンタクトの比較と違いを洗い出し、プレゼンテーションとアカデミックライティングの文章構造・言語形式・内容における言語分析を実施し、日本の小中高等学校と大学、さらに日本と英語圏の英語プレゼンテーション教育の現状と政策を洗い出し、日本の教育現場に適した方法での、リーダーシップにつながる英語プレゼンテーション

教育を焦点を当てて研究を実施した。

英語学習者の英語プレゼンテーション動画データは、合計 158 人分、一人あたり 1 回乃至 5 回分のプレゼンテーション動画の合計 837 ファイル収集することができ、動画解析ソフト ELAN を使用して文字化し、学習者による英語プレゼンテーションの言語と非言語の両方が分析できるよう整備・分析した。また、プレゼンテーション動画データを元に、研究代表者による科学研究費助成事業「日本人英語学習者の論文の執筆支援のための基礎研究（課題番号 25370705）」で構築した日本語話者による英語意見文コーパスデータ The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students と比較分析することができた。

英語プレゼンテーション教育の政策については、日本全国の自治体と教職課程を持つ大学の教育方針テーマのアンケート調査を実施する事ができた。その他にも日本の小学校教員 1 名、高校教員 3 名、及びカナダの大学教員 3 名とオーストラリアの大学教員 1 名に英語プレゼンテーション教育についてのインタビュー調査を実施し、大学教育との連携について考察する事ができた。

4. 研究成果

初年度は、日本の大学生の英語プレゼンテーションデータ収集と日本全国の自治体と教職課程を持つ大学の教育方針テーマのアンケート調査が実施できた。プレゼンテーションデータは 158 人分を 1 年間で一人あたり 1 回乃至 5 回分収集し、学習者の 1 年間での英語プレゼンテーションスキルの変化の観察が可能となった。学生は自分のプレゼンテーション動画を復習として閲覧し内省することで客観的視点を持ち、さらに他者のプレゼンテーションを見ることにより強みや弱みに気づき、プレゼンテーションスキルの強化に役立つことがわかった。

アンケート調査については、日本全国の教育委員会を対象に、郵送とオンラインの両方で調査を実施し、その結果から各自治体が掲げる英語教育の方針に関して国際理解、グローバル化に対応した教育、コミュニケーション能力の育成、小中高の連携、技能統合、グローバル社会に対してのふるさと文化についての意識が強いことが判明した。また、英語教育における児童や生徒の主体性に関する取り組みだけでなく、英語教員の指導力養成についての政策や傾向も明らかになった。大学教職課程での調査は、中学・高等学校の英語教職課程を持つすべての大学にアンケート調査を実施し、高大接続の足がかりとすることができた。これらの包括的な大規模な調査によって、教育委員会や教育者が英語教育においてプレゼンテーションを特定のスキルとして扱っているわけではなく、スピーキングやスピーチの中の一つ、という程度にとどまり、プレゼンテーション教育が小学校から高等学校において一つの教育対象となるスキルとして確立していないことがわかった。また教職課程での学びにおいて、実践経験が不足していると考えられる大学教員が多いこともわかった。

また、私立高校を訪問し、英語教育・プレゼンテーション教育の現状についてインタビューをすることができた。そこで高校生・高等学校の求める英語教育やその問題点などについて調査することができたが、教育改革を進めるには入試改革が必要であるとの強い見解がある事が判明した。

2019 年度には、初年度（2018 年度）に収集した日本の大学生のプレゼンテーション動画データを分析し、プレゼンテーションスキルにおいて重要な役目を果たすアイコンタクトについて時間横断的に調査することができた。日本人英語学習者は、5 回に及ぶプレゼンテーションを経ても、聴衆とのアイコンタクトを取ることが難しいことがわかった。これは過去のアイコンタクトについての科学的実証研究の結果にも沿うもので、学習者はいざ英語でプレゼンテーションとなった時、言語自体は英語に変えることができても非言語コミュニケーションの一つであるアイコンタクトの方法は変えることが難しいということがわかり、プレゼンテーションにおいて言語以外の重要な非言語コミュニケーションにおける課題も明らかとなった。

初年度に引き続き小学校、中学校及び高等学校の英語教育についてのアンケート調査においては、都道府県レベルではコミュニケーション能力養成、四技能統合、学習者の主体性、連携、国際理解、グローバル化、ふるさとという 7 つの英語教育におけるテーマが重要視されていること、さらにはそれよりも小さな地域の市レベルでは ALT との連携やイングリッシュ・キャンプといったような、より具体的な取り組みに重点を置いていることがわかった。

海外でのプレゼンテーション教育についての調査は、カナダのケベック州モントリオールでの言語教育について、大学の教員 3 名にインタビュー調査を実施することができた。この調査により、英語とフランス語におけるプレゼンテーション教育では、言語による談話構造の違いを学習者に気づかせる必要があること、また言語と非言語コミュニケーションの両方がプレゼンテーションスキルにおいて重要視され、プレゼンターとしての立場を明確にすることが良いプレゼンテーションにつながると考えている教員が多いことがわかり、今後の教育の示唆が得られた。

2020 年は、コロナ感染症予防のため対面の研究活動も制限されたが、それまでに収集したデータ分析を進めるとともに、オンライン授業における英語プレゼンテーション教育の影響と可能性について学生対象のオンラインアンケート調査を実施することができた。この年から全国的に授業がオンラインとなったためオンラインでの教育についての注目度が高く、研究発表でも様々な研究者からフィードバックを得ることができ、今後の研究を進める上での糧となった。

日本における初等・中等・高等教育におけるコミュニケーションやアウトプットの教育につい

でも研究を進めることができ、各自治体の英語教育で力を入れているテーマを調査し、その結果を論文にもまとめることができ、高大連携の糸口を掴むことができた。

実際に学習者が英語プレゼンテーションを学ぶ意義とその教育効果をさらに探究するため、どのようにリーダーシップ教育に活かすことができるかという視点からの分析も開始し、女性のリーダーシップやチームワーク、及び社会参画におけるプレゼンテーションスキルとその教育の重要性と今後の教育への示唆を学会発表で提言することができた。分析の結果、特に日本の女子教育においては、異文化理解と自己肯定感がリーダーシップとチームビルディングスキルを高める可能性があることがわかった。発表では世界中の研究者だけでなく一般企業に携わる方々や起業家からのフィードバックも得ることができ、その結果を論文としても発表することができた。

2021年には動画解析ソフト ELAN を使用してこれまでに収集したプレゼンテーション動画を文字化し、言語と非言語の両方が分析できるよう整備・分析した。その成果をもとに、International Association of Applied Linguistics World Congress に於いて、学習者による英語プレゼンテーションの談話と言語使用について発表することができ、世界中の参加者から示唆を得て今後の研究の参考となった。大学英語教育学会関東支部大会に於いても、研究分担者与其他 7 名とワークショップを開催し、高大連携やプレゼンテーションの談話研究を含む英語教育に関わる研究成果を発表した。その他グローバル社会におけるリーダーシップスキルと英語プレゼンテーション能力についての関連についても、研究成果を発表できた。

さらに教育現場の実態調査を進めるため、茨城県の公立高校英語教員と大分県の小学校教員各 1 人にインタビューし、大学での英語プレゼンテーション教育との関連調査を進めた。高校ではやはり大学受験に関わる英語教育が主となる傾向があるが、探究の授業等で大学とのプレゼンテーション教育とコラボレーションの可能性があり、そこから英語(プレゼンテーション)教育の連携を図ることができるのではないかという可能性が見えてきた。小学校の英語教育においては、インタビューを受けた教員が大分県の英語教育研究指定校で教育に携わっていたこともあり、休み時間も英語を使ったり、ALT 教員だけでなく日本人教員も積極的に英語を使い生徒と英語活動をしており、生徒も積極的に英語を使用していたことがわかったが、全学年少人数の小学校で実施されているプログラムであるため、人数の多い小学校で同様の活動を実施するのは容易ではなさそうであった。

2022 年度は、初年度から 2 年間に渡り収集した大学生のプレゼンテーション動画データを言語分析し、英語学習者による英語プレゼンテーションの談話構造の傾向をリングフランカとしての英語使用という視点から分析し、連携研究者と研究分担者とともに、Learning and Teaching Interactions in Pragmatic Aspects Vol 1 (Language Use in Contexts Inside and Outside English Language Classrooms) に論文投稿し受理され、研究結果を論文として出版することができたことは大きな成果であった。これにより大学生の英語プレゼンテーションにおける言語特徴を明らかにすることができ、日本での英語プレゼンテーション教育の分野にも貢献できたといえる。

その他には、The 61th JACET International Convention の国際大会において、英語学習者がリングフランカとしての英語を使用することにより、異文化理解とリーダーシップ育成及びチームビルディングにポジティブな影響が期待できるという研究結果を発表し、様々な国から参加していた研究者らから有益な示唆を得て、本研究への新しい知見を得ることができた。

前年度(2021 年度)よりインタビュー調査した小学校の教員から、さらに小学校英語教育の現場と実情も追加調査することができた。ここでは生徒が英語を使うことへの好感度が高いが、検定試験受験は生徒の家族の金銭面での理解を得ることに課題があるため全員が受験できておらず、現時点では小学校教育において英語教育の効果を測る術が他になく、教育成果の評価方法に検討の余地があることが明らかになった。

本研究の最終年度では、これまでに収集した大学生によるプレゼンテーション動画データを元に、大学生のライティングデータと比較するため、研究代表者による科学研究費助成事業「日本人英語学習者の論文の執筆支援のための基礎研究(課題番号 25370705, 2015 年度完了)」で構築した日本語話者による英語意見文コーパスデータ The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students の書きことばと比較分析することができた。書きことばと話しことばの接点であるプレゼンテーションの言語における英語学習者の特徴は談話的に似た傾向が見られることがわかった。プレゼンテーションと意見文のような書きことばの共通点は、主たるメッセージである thesis を終わりに伝える学習者が多く、聴衆の興味を引くわかりやすいプレゼンテーションは必ずしもそのような談話構造にはなっていないことも明らかとなった。プレゼンテーションも書きことばも 4 または 5 パラグラフで構成する学習者が多く、パラグラフ 1 では導入と thesis を支持する内容の数を告げ、パラグラフ 2 と 3 (または 4) で thesis を支持する事項、最後のパラグラフで thesis を伝える、というパターンの談話構造が見られ、英語母語話者の談話構造とは異なり、学習者の書きことばの構造に大きく影響されている可能性が明らかとなった。また thesis を支持する事項については、実際には論理的ではない内容が多いことも明らかとなり、学習者の論理的思考におけるスキルについても、効果的なプレゼンテーションにおいて重要であることがわかった。

本研究結果をリングフランカと言語比較の両側面から検討し分析も進め、8 月にはオーストラリアメルボルン大学のアジアインスティテュートに招聘され、本研究全体の研究結果を海外に

において講演し共有することができた。またメルボルンにて日本の大学生の英語ライティングを調査している高校の教員とも意見交換することができ、教育の実情と将来の可能性について意見交換をすることができた。メルボルン大学は本研究においても協力を得た教育機関であり、本研究の成果発表の締めくくりとして相応しい研究会となった。

その他にも、これまでのプレゼンテーション教育と高大接続における研究結果を英語教育に生かすための具体的なアイデアを、大学英語教育学会関東支部講演会に招聘され講演し、本研究の成果を発表することにより多くの参加者と情報共有することができた。

教育の連携についての調査も継続することができ、大分県の小学校英語教育のケースについて追加のインタビュー調査を実施することができた他、本研究期間内に実施した北海道、茨城、東京で合計 3 名の現役高校英語教員とカナダの大学教員 3 名のインタビュー調査の結果を包括的に分析すると、カナダでは小学校の頃から外国語教育に限らず様々な教科において、show and tell のような授業中に一人でクラスの前に立って話す機会が多くあり、人の前で話すこと自体に慣れていることも、プレゼンテーション教育に影響している可能性が高い。一方日本では授業中に一人でクラス全員の前に立って、話したりする活動自体が英語圏と比較すると圧倒的に少ない。人の前に立ち、目立つことをするということが、まだ日本の文化や生活習慣の中では、どちらかという避けられる傾向があることも、これからのグローバル社会では変革を要する点といえるだろう。

教育現場の視点からは、小学校では児童の楽しさを意識した発進型の話す英語教育が盛んであるが、高校受験を意識した中学の英語教育との乖離が大きく、同じく高等学校も大学受験に重点が置かれがちであるため、今後はこのギャップを埋めるような教育政策の必要性が迫られているといえる。昨今の大学受験の新しい動向でプレゼンテーション型入試が採用され始めているが、多くの大学が若干名の募集人数に留まっており総合的な数は多くないため、中学校と高等学校の英語教育への影響はまだ少ないといえる。ただ一部、大学と共同で英語の授業を実施したりしている高等学校もあり、組織的にプレゼンテーション教育も実施している学校もあるが、それはたまたまその場にいた教員や周囲の人々の協力があったからのようである。今後は全国的に組織的な取り組みができるような教育政策が必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 Megumi Okugiri, Lala Takeda, Shin'ichiro Ishikawa, & Tom Gally	4. 巻 1
2. 論文標題 The Approach to Introductions in English Presentations by Japanese University Students	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Learning and Teaching Interactions in Pragmatic Aspects Vol 1 –Language Use in Contexts Inside and Outside English Language Classrooms–	6. 最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Lala U. Takeda	4. 巻 58
2. 論文標題 Co-occurrence of linguistic and non-linguistic behaviors: Single case analysis of Japanese EFL learners' allo-repetition and gazing	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本女子大学英米文学研究	6. 最初と最後の頁 185-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Lala U. Takeda	4. 巻 Online first
2. 論文標題 Overlaps in collaboration adjustments: A cross-genre study of female university students' interactions in American English and Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Pragmatics: Quarterly Publication of the International Pragmatics Association (IPrA)	6. 最初と最後の頁 該当なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/prag.21009.tak	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Lala U. Takeda	4. 巻 該当なし
2. 論文標題 Chat-style writing in teaching conversation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PanSIG Journal 2021	6. 最初と最後の頁 279-287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥切恵、 林真樹子	4. 巻
2. 論文標題 チームワーク実践におけるリーダーシップ教育の自己変容の一考察：女子大学生を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本リーダーシップ学会第6回研究講演会講演論文集	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 林真樹子、奥切恵	4. 巻 5
2. 論文標題 大学生を対象としたチームワーク実践におけるリーダーシップ教育の自己変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本リーダーシップ学会論文集	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Megumi Okugiri	4. 巻 12
2. 論文標題 A Case Study of Leadership at a Women's College: Teamwork, Diversity, and Confidence Building	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Proceedings of 12th Annual Women's Leadership and Empowerment Conference.	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤尾美佐, 山口高領, 新井巧磨, 飯田敦史, 奥切恵, 金子淳, 鈴木健太郎, 辻りこ, 中竹真依子, 濱田彰, 横川博一, 木村松雄	4. 巻 1月号
2. 論文標題 各自治体の英語教育で力を入れているテーマ調査・2	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語教育2021年1月号	6. 最初と最後の頁 76-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Lala Takeda	4. 巻
2. 論文標題 Elicitation of mutual understanding and achievement of coherence: Allo-repetition in Japanese EFL speaking and chat-style writing interactions	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Lee, Cynthia (ed.) Second Language Pragmatics and English Language Education in East Asia	6. 最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥切恵	4. 巻 133
2. 論文標題 日本人大学生による英語プレゼンテーションとアイコンタクト	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 聖心女子大学論叢	6. 最初と最後の頁 53-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村松雄, 藤尾美佐, 山口高領, 奥切恵, 青田庄真, 新井巧磨, 飯田敦史, 金子淳, 鈴木健太郎, 多田豪, 辻りこ, 中竹真依子, 濱田彰, 横川博一	4. 巻 増刊号
2. 論文標題 英語教育コアカリキュラムは教員養成課程でどのように捉えられているか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育10月増刊号	6. 最初と最後の頁 91-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤尾 美佐・山口 高領・青田 庄真・新井 巧磨・飯田 敦史・奥切 恵・金子 淳・鈴木 健太郎・多田 豪・辻りこ・中竹 真依子・濱田 彰・横川 博一・木村 松雄	4. 巻 2
2. 論文標題 全国都道府県英語教育研究テーマの調査研究 全国市レベルの取り組み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	6. 最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥切恵	4. 巻 3
2. 論文標題 女子大学でのリーダーシップ教育と英語の使用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本リーダーシップ学会論文集	6. 最初と最後の頁 8-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Megumi Okugiri	4. 巻 10
2. 論文標題 Building student confidence in English as a second language and communication in a women's leadership program	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of 10th Annual Women's Leadership and Empowerment Conference	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥切恵, 濱田彰, 中竹真依子, 辻りこ, 米山明日香, 藤尾美佐, 木村松雄	4. 巻 1
2. 論文標題 JACET関東支部特別研究プロジェクト(A); 都道府県・政令市における英語教育研究テーマに関する実態調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the Japan Association for Applied Linguistics in JACET	6. 最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 飯田敦史, 山口高領, 奥切恵, 青田庄真, 新井巧磨, 鈴木健太郎, 多田豪, 辻りこ, 中竹真依子, 濱田彰, 藤尾美佐, 米山明日香, 木村松雄	4. 巻 6
2. 論文標題 教員養成課程コアカリキュラムの実態調査 大学教職担当者の見解から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JACET-KANTO Journal	6. 最初と最後の頁 23-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村松雄, 奥切恵, 山口高領, 青田庄真, 新井巧磨, 飯田敦史, 鈴木健太郎, 多田豪, 辻るりこ, 中竹真依子, 濱田 彰, 藤尾美佐, 米山明日香	4. 巻 3
2. 論文標題 都道府県・政令市が目指す英語教育・学習者像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英語教育2019年3月号	6. 最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田らら	4. 巻 該当せず
2. 論文標題 基盤化と語用論教育 日本人英語学習者のチャット形式作文と会話での反復から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本女子大学文学部 文学研究科学術交流企画シンポジウム『相互行為と語学教育』予稿集	6. 最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥切恵	4. 巻
2. 論文標題 女子大学生のチームワーク実践におけるリーダーシップと Social and Emotional Learning	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 JLA第8回研究講演会講演論文集	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田らら・大場美和子・山本綾・松橋由佳	4. 巻
2. 論文標題 日本におけるTranslanguaging研究の動向調査 『日本語教育』・JALT Journal・『社会言語科学』における会話データ分析論文から	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 社会言語科学会第48回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 14件）

1. 発表者名 Megumi Okugiri
2. 発表標題 Leadership Education and English Use: Building College Student Confidence in English
3. 学会等名 The 61th JACET International Convention (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Megumi Okugiri
2. 発表標題 Leadership, Diversity Education, and Lumina Spark at the University of the Sacred Heart Tokyo
3. 学会等名 Lumina Connect 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Lala Takeda, Megumi Okugiri, Naoko Osuka, Pino Cutrone, Keisuke Imamura, Misa Fujio, Ivan Brown, Ayaka Takeuchi, & John Campbell-Larsen
2. 発表標題 Foreign Language or Lingua Franca: Examination of the Application of Research Outcomes to Language Education Through Pragmatics
3. 学会等名 Japan Association of College English Teachers Kanto 14th Annual Convention
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Megumi Okugiri, Lala Takeda, Shin'ichiro Ishikawa, & Tom Gally
2. 発表標題 The approach to introductions in English presentations by Japanese university students
3. 学会等名 International Association of Applied Linguistics World Congress 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Megumi Okugiri
2. 発表標題 Women's leadership and teamwork in Japan: Leadership style and culture
3. 学会等名 13th Annual Women's Leadership and Empowerment Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹田らら
2. 発表標題 相互行為にみられる言語調整機能
3. 学会等名 日本女子大学文学部 文学研究科学術交流企画シンポジウム 第3回 相互行為と語学教育
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Lala U. Takeda
2. 発表標題 Topic development through allo-repetition in EFL-speaking and chat-style writing: From the viewpoint of dependency and creativity in context
3. 学会等名 International Association of Applied Linguistics World Congress 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Lala U. Takeda
2. 発表標題 A provisional suggestion on linguistic and cultural inclusion in the co-occurrence of verbal and non-verbal cues: The case of overlaps
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (IPrA 2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Lala U. Takeda
2. 発表標題 Chat-style writing in teaching conversation
3. 学会等名 2021 JALT PanSIG Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Megumi Okugiri
2. 発表標題 A Case Study of Leadership at a Women's College: Teamwork, Diversity, and Confidence Building
3. 学会等名 12th Annual Women's Leadership and Empowerment Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥切 恵
2. 発表標題 オンライン授業における英語プレゼンテーション教育の影響と可能性
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会 2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹田 らら
2. 発表標題 他者反復にみる言語的『重なり』と非言語的『重なり』の共起：日本人英語学習者のデータから
3. 学会等名 他者反復にみる言語的『重なり』と非言語的『重なり』の共起：日本人英語学習者のデータから
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤尾 美佐・山口 高領・青田 庄真・新井 巧磨・飯田 敦史・奥切 恵・金子 淳・鈴木 健太郎・多田 豪・辻 りこ・中竹 真依子・濱田 彰・横川 博一・木村 松雄
2. 発表標題 全国都道府県英語教育研究テーマの調査研究 全国市レベルの取り組み
3. 学会等名 第2回JAAL in JACET学術交流会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥切恵
2. 発表標題 女子大学でのリーダーシップ教育と英語の使用
3. 学会等名 Japan Leadership Association 第4回研究講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田 らら
2. 発表標題 Co-Occurrence of Verbal and Non-Verbal Cues in Grounding: A Study on Allo-Repetition and Gaze in Japanese English as a Foreign Language (EFL) Interaction
3. 学会等名 JACET 58th International Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田 らら
2. 発表標題 日本人英語学習者の話題展開と理解構築：会話とチャット形式作文での反復表現を比較して
3. 学会等名 日本語用論学会第22回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Megumi Okugiri
2. 発表標題 Building student confidence in English as a second language and communication in a women's leadership program
3. 学会等名 10th Annual Women's Leadership and Empowerment Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥切恵, 濱田彰, 中竹真依子, 辻るりこ, 米山明日香, 藤尾美佐, 木村松雄
2. 発表標題 JACET関東支部特別研究プロジェクト(A): 都道府県・政令市における英語教育研究テーマに関する実態調査
3. 学会等名 The Japan Association for Applied Linguistics in Japan Association of College English Teachers (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 奥切恵
2. 発表標題 英語アカデミックライティングとプレゼンテーションのデータ収集と研究, そして教育
3. 学会等名 青山学院英語教育研究センター・JACET関東支部共催講演会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Lala Takeda
2. 発表標題 Multimodality in overlaps and pragmatic awareness
3. 学会等名 2018 JALT PanSIG Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹田らら
2. 発表標題 英語での会話力向上のためのチャット形式作文の導入と語用論的側面の指導
3. 学会等名 日本語用論学会 第21回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹田らら
2. 発表標題 基盤化と語用論教育：日本人英語学習者のチャット形式作文と会話での反復から
3. 学会等名 日本女子大学文学部 文学研究科学術交流企画シンポジウム『相互行為と語学教育』（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Megumi Okugiri
2. 発表標題 Use and function of “ I think ” by Japanese speakers: A discourse marker denoting the main message
3. 学会等名 A talk event at the Asia Institute of the University of Melbourne (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹田らら、奥切恵
2. 発表標題 語用論の英語教育への応用と可能性：スピーキングとライティングからみえること
3. 学会等名 12月大学英語教育学会関東支部講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Megumi Okugiri
2. 発表標題 Enhancing Leadership and Teambuilding Skills: A Case Study of Social and Emotional Learning in Japanese Female College Students
3. 学会等名 15th Women's Leadership and Empowerment Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 竹田らら・大場美和子・山本綾・松橋由佳
2. 発表標題 日本におけるTranslanguaging研究の動向調査: 『日本語教育』・JALT Journal・『社会言語科学』における会話データ分析論文から
3. 学会等名 社会言語科学会第48回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

聖心女子大学教育研究業績書 奥切恵 https://faculty.u-sacred-heart.ac.jp/DBxx/GyousekiDB/webFile/H15090.html Megumi Okugiri HP https://okugiri.wixsite.com/website
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竹田 らら	昭和女子大学・総合教育センター・講師	
	(Takeda Lala) (80740109)	(32623)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ガリー トム (Gally Tom) (80447317)	東京大学・グローバル教育センター・特任教授 (12601)	
研究協力者	石川 慎一郎 (Ishikawa Shin'ichiro) (90320994)	神戸大学・大学教育推進機構・教授 (14501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オーストラリア	The University of Melbourne			
カナダ	University of Montreal	Concordia University		